

21世紀COEプログラム 平成16年度採択拠点中間評価結果

機関名	東京工業大学	拠点番号	K09
申請分野	K<革新的な学術分野>		
拠点プログラム名称 (英訳名)	インスティテューショナル技術経営学-日本型共進ダイナミズムの解明と世界価値への昇華 The Science of Institutional Management of Technology		
研究分野及びキーワード	〈研究分野: 社会・安全システム科学〉(経営工学)(生産システム)(知的財産法)(企業経営)(経営史)		
専攻等名	大学院社会理工学研究科 経営工学専攻; 大学院イノベーションマネジメント研究科 (大学院理工学研究科; 理財工学研究センター; 大学院情報理工学研究科 計算工学専攻, 平成17年4月1日)		
事業推進担当者	(拠点リーダー名) 渡辺 千俣 他19名		

◇拠点形成の目的、必要性・重要性等：大学からの報告書（平成18年4月現在）を抜粋

<本拠点がカバーする学問分野について>	<p>次の3軸5テーマの立体的アプローチを追求。</p> <p>1.戦略・戦術レベル: 技術イノベーション牽引力を決める市場-技術相互作用メカニズムのシステム分析</p> <p>2.オペレーションレベル: 日本型技術イノベーション創出サイクルの体系化</p> <p style="margin-left: 20px;">(2a) 日本型技術創造の方法論</p> <p style="margin-left: 20px;">(2b) 無形資産の在庫マネジメントの理論と手法</p> <p style="margin-left: 20px;">(2c) 日本型インスティテューションにおける技術の事業化戦略</p> <p>3.歴史的俯瞰: 技術イノベーションと共進しうるインスティテューションの歴史的示唆抽出</p>
<本拠点の目的>	<p>1. 日本の技術経営が本来機能を回復し、世界価値を創造するダイナミズムについての理論・方法論を探求。</p> <p>2. このため、イノベーションの創出は、「国家戦略・社会制度」、「企業レベルでの組織文化」、「時代背景」の3軸で象られるインスティテューションとの共進のダイナミズムに大きく依存し、日本型技術経営のシステムは、本来的にこの面の卓越した機能を内包するとの認識に則り、その共進ダイナミズム解明に立脚した「インスティテューショナル技術経営学」を確立。</p>
<計画・当初目的に対する進捗状況等>	<p>研究拠点形成実施計画に従って、次の3事業を展開し、当初計画どおり着実に進捗。</p> <p>1. 基盤研究</p> <p style="margin-left: 20px;">① 事業推進担当者が、3軸5テーマの基盤研究を分掌し、拠点の相乗効果を追求しつつ最先端の研究に邁進。</p> <p style="margin-left: 20px;">② 本分野で実績のある社会科学系の研究者・ビジネス最先端の実務経験者を中心に特任教授グループを構築。</p> <p style="margin-left: 20px;">③ 2005年4月に以上を総合的に支えるインスティテューショナル技術経営学研究センター（センター）を設置。</p> <p>2. 国際的コラボレーション</p> <p style="margin-left: 20px;">④ 積年の協力関係を基に米・欧(独・仏・英・澳・蘭)・印・中・露・豪の学術機関と国際コラボレーションネットワークを構築。</p> <p style="margin-left: 20px;">⑤ ①を基に共同研究を推進。定期的に国際シンポジウム・ワークショップを開催し研究発表・討論。学生発表も奨励。</p> <p style="margin-left: 20px;">⑥ さらに、海外客員研究員の招聘、若手研究員の派遣等の交流を実施。</p> <p>3. 教育・育成プログラム</p> <p style="margin-left: 20px;">⑦ 2005年4月開設のイノベーションマネジメント研究科との連携の下、特任教授陣を督励し、世界リーダー輩出教育を推進。</p> <p style="margin-left: 20px;">⑧ RA・若手研究者・ポスドクの競争的支援。3ヶ月のインターン/海外研修旅行。スーパードクタートラック(博士加速修了コース)準備。</p> <p style="margin-left: 20px;">⑨ ②, ③のノウハウも活用しつつ、内外学会での研究発表を奨励。月例学会フォーラム開催、学生主導シンポ奨励。</p>
<本拠点の特色>	<p>1. ねらいの革新性: 日本型技術経営の強弱双方を下敷に、イノベーションとインスティテューションの共進的ダイナミズムを解明。</p> <p>2. アプローチの革新性: 3軸の工学アプローチにより、共進的ダイナミズムを可視化・操作化。</p> <p>3. ビジョンの革新性: 以上の成果を世界価値に昇華することにより、各国の相互発展に役立つ世界価値を創出。</p> <p>4. 組織の革新性: イノベーションマネジメント研究科との密接な連携の下、「センター」を軸に拠点の5年後の固定化を展望しつつ展開。</p>
<本拠点のCOEとしての重要性・発展性>	<p>1. 日本経済再生のための産学官への重要な処方箋・学術基盤・研究教育人材を提供。</p> <p>2. 世界経済再活性化への重要な知的貢献、日本主導の学術・経済両面の国際貢献の地平を開拓。</p>
<本プログラム終了後に期待される研究・教育の成果>	<p>1. 研究面: 「インスティテューショナル技術経営学」の基盤となる以下の研究成果を取得。</p> <p style="margin-left: 20px;">(1) 日本型イノベーション創出サイクルの源泉およびその牽引力を決定づける市場と技術の相互作用のメカニズムの解明。</p> <p style="margin-left: 20px;">(2) 同サイクルの各ステージにおける、イ) 日本型イノベーション創出、ロ) 無形資産の在庫マネジメント、ハ) 日本型インスティテューションにおける事業成功の理論と方法論の開発。</p> <p style="margin-left: 20px;">(3) イノベーションと共進しうるインスティテューションの性質に関する歴史的示唆の抽出。</p> <p>2. 教育面: イ) 日本型技術経営を学術的に研究し教育できるMOTリーダー、ロ) 内外の企業・研究機関で実践面での指導的な役割を果たせる国際実践リーダー、ハ) 次世代の先端研究を担う先端研究者を輩出。</p>
<本拠点における学術的・社会的意義等>	<p>1. 「イノベーションとインスティテューションとの共進ダイナミズム」が解明、可視化・操作化され、世界価値に昇華。</p> <p>2. 内外経済再活性化に貢献、日本の技術経営が本来機能を回復し、世界に死蔵するイノベーション資源を発掘・活用。</p>

◇ 21世紀COEプログラム委員会における所見

(総括評価)

当初目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要と判断される。

(コメント)

人材育成に関しては、RA・ポスドク等もかなりの人数をそろえ、また日本型MOT教育を確立するべく、努力をしていることが見られる。

本テーマは、多くの人々が期待しているテーマでありながら、その構造を解明するのが難しいと考えられている。これに正面よりチャレンジしていることは十分評価される。特に学内に留まらず、国際的、国内的にも幅広く交流する努力をしていることは認められる。

しかし、難問であるが故に、成果が抽象的なレベルになりがちである。

インスティテューショナル技術経営学という新分野について、これまでの技術経営学とは異なった新たな知見の具体的なイメージが見えにくい。日本型と呼びうる共進ダイナミズムについて、現実問題との関連を明示した上で、これまでには見られないどのような新しい論点を提起できるのかを明確にしていくことが必要である。